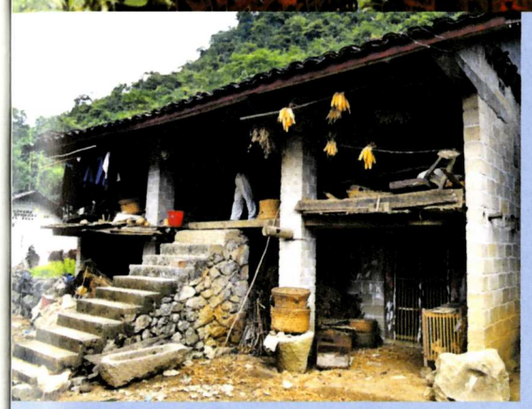
特集

西南中国

著しい経済成長や北京オリンピックと、最近話題にことかかない中国。漢族が活躍していると思われがちだが、少数民族も存在する。西南中国は多くの少数民族が錯綜して居住する地域である。市場経済化のなかで、多彩な文化が観光化されているこの地域に注目し、従来とは違った顔をもつ中国について触れてみたい。

着飾ったミャオ族の女性（貴州省）



チワン族の高床式住居（広西チワン族自治区）

水かけ祭りで、タイ族の娘たちから歓迎される観光客（雲南省）

多彩な少数民族

塚田 誠之
（つかだ しげゆき）
本館先端人類科学研究部

文化的な差異

多民族国家中国では五五の少数民族が公認されている。総人口約一三億人の八パーセントほどに過ぎないが一億人を超える。うちチワン（壮）族は人口がもっとも多く一六一八万人を擁する（二〇〇〇年）。少数民族のうち三〇以上もの民族が広西、雲南、貴州、四川、チベット東部などの西南中国を主要居住地としている。少数民族には下位集団が存在する場合が多い。ヤオ（瑶）族の場合、言語上は三つのグループに分類されるが、広西の金秀ヤオ族自治県では文化的に差異のある五つの下位集団が共住している。民族は決して一枚岩的存在ではないのである。

少数民族の文化は多彩である。一層に家畜を飼養し二層に人が住む高床式住居、銀を好み女性の装身具に用いる習俗、漆器や竹木製の道具、蘆笙や銅鼓の楽器など、どれも特徴がある。また年中行事について、多くの非漢族が漢族同様、春節（旧暦正月）を歳首とするが、タイ（傣）族は仏暦によって四月を歳首とする。イ（彝）族やペー（白）族のたいまつ祭りやチワン族の歌掛けなど独自の行事もある。少数民族のうち一二が伝統的な文字をもつが、西南中国ではイ族やタイ族の文字、ナシ（納西）族のトンパ文字に特徴が見られる。

漢族と非漢族

中国の歴史は一面では漢族の勢力拡大の過程である。古代には四川や雲南などで独自の青銅器文化が発達したが、のちに漢族の勢力がおよんだ。漢族が非漢族と接触した際には図説を含む記録が漢族の側から書かれた。漢族の進出は非漢族の「漢化」現象をともなった。たとえば、チワン族の高床式住居は一見、非漢族に独自であるようだが、漢族の影響が随所に見られる。家の前門から祭壇を結ぶ中心のラインの重視、門に門神を貼り、柱に縁起のよい詩句を書いた「対聯」を貼ること、鉄製の農具や鍋、カマドでの調理、イス・テーブルなど家具、建築の際に風水を見ること、柱を貫で結合した「穿闘式」構造などが挙げられる。チワン族は、春節や三月の墓参・中元節・中秋節などの年中行事の過ごし方に漢文化を受容した。しかし、他方で、歌掛けや行事食品としてモチ米製品を用いる点に独自性が見られる。なお、ペー族の木彫技術のように、漢族から受容した文化が独自に発展したり、非漢族のあいだでも地域社会での力関係にともなう影響の授受があり、漢族・非漢族の二分法だけでは語れない。そのことはトン（侗）族のことばの多義性にも垣間見られる。漢族自身にも文化変容があるし「近代化」による影響もあるが、歴史の潮流として、非漢族の文化は漢族をはじめとする外部との交流を経て形成されてきたのである。

近年、グローバル化の進展の下、観光業が発展し、文化の商品化・産業化が進み、農村が大きく変貌を遂げるなどあらたな局面を迎えている。この動きは雲南のタイ族の村など各地で生じている。あらたな文化形成の動きは現在も進行中である。少数民族の多彩な文化を知り、その現在の動向を注視することは中国文化のもつ奥深さを理解するうえで意味のあることである。

五色に染めたオコワ。チワン族の3月3日の祭りの行事食（広西チワン族自治区）

除夜の日に門神、対聯の貼り換えをするところ（広西チワン族自治区）

王朝から見た異人たち

武内 房司
（たけうち ふさじ）
学習院大学教授

少数民族の姿と習俗

中国の歴代の王朝には、今日で言えば国内の少数民族を含めて朝貢にやってくる国々や民族地区の人びとを絵画に描くならわしがあった。世界のさまざまな国や民族の使者が中国にやってくるのは中国の文化や支配者の徳のたかさを示すものだとする考え方に基づくものだった。自分の文化や徳を誇示することを目的として描かれたこうした資料を『職貢図』とよんでいる。とりわけ、歴代王朝のなかで最大版図を獲得した清の乾隆帝が一八世紀半ばに製作を命じた『皇清職貢図』は有名である。そこには、朝鮮の官僚を描いた「朝鮮国夷官」からはじまり、男女一対からなる三〇〇以上もの民族の図像が収められた。

この『皇清職貢図』の編纂は王朝の権威を誇示するための公的な編纂事業だったが、これに刺激を受けてか、一八世紀から一九世紀半ばにかけて、民間でも中国各地に住む民族の姿や風俗が盛んに描かれるようになった。そこでは、各民族の姿がヴィジュアルに描き出されるとともに、各民族のめずらしい習俗が文章で簡潔に紹介された。いわば絵画と説明とがセットになっていることから、しばしば『〇〇図説』といったタイトルがつけられた。

貴重な資料として

これらの『図説』の編纂にかかわったのは、多くの非漢族が住むことで知られる貴州や雲南といった中国の西南地域に赴任した地方官たちだった。これらの『図説』が製作されはじめたのは、一八世紀以降、西南諸地域で許されていた少数民族の首長（「土司」）による間接統治が廃止され、中央派遣官僚（「流官」）による直接統治へときりかえられる、いわゆる「改土帰流」政策が採用された時期にもあたっている。言語や文化の異なる地域に送り込まれた漢族出身の地方官は、今まで触れたことのない民族の習俗に好奇のまなざしを向け、画家たちにその姿や習俗を描写するよう命じたのだった。序文などを読むと、しばしば、決してものめずらしさから編纂したのではなく、あくまで統治に役立てるためである、などともっともらしいことが書いてある。しかし、古代日本の歌垣にも似た祭りをつうじて婚姻対象を選ぶなど、形骸化した儒教の規範に縛られることなく、貴州の少数民族の姿が地方官や儒教知識人たちに清新な印象を与えたことは想像に難くない。こうした異文化への強い関心によって支えられ、編纂された『民族図説』は、その大きく変容を遂げた西南中国の少数民族社会を知るうえでも貴重な資料といえる。

貴州省の貴陽付近に住んでいたクーラオ族の女性の抜歯習俗を紹介したもの。説明では、嫁ぐ娘が夫に牙をむかないように抜歯するとあるが、成人式としての意味をもっていた

貴州の貴筑などに住んでいた“土人”の儺（な）の祭りを描いたもの

『精絵苗蛮全図』（慶應大学言語文化研究所所蔵）より

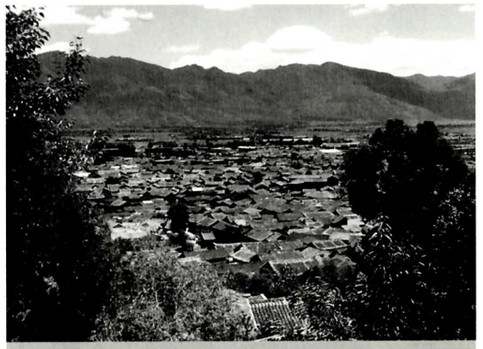
ペー族の木の匠

横山 廣子
（よこやま ひろこ）
本館民族社会研究部

中国木彫の郷

世界遺産登録された雲南省麗江の町の魅力のひとつは、古い家並みである。高台に立つと、黒みを帯びた甍の見事な連なりが望める。その多くの家屋はおもな住人であるナシ族ではなく、麗江の南隣りに位置する剣川県のペー族の大工の手で建てられた。一九四〇年代に麗江に滞在し、『忘れられた王国』を著したグーラートは、ペー族の大工の卓越した腕前を讃え、昆明やそのほか雲南の主要都市の金持ちは彼らを招いて屋敷を建造すると記している。

剣川の大工が建てる木造建築のすばらしさは、太い柱を組んで姿美しく頑丈につくられる構造もさることながら、扉や窓、梁の装飾などにほどこされた精緻な木彫にある。花や鳥、動物などを配置した木彫がはめ込まれた扉は「格子門」といい、ペー族の家ならそれがあって当たり前である。余裕のある家や寺院などの扉の幾重にも重なった透かし彫りは、息をのむできばえである。繊細な木彫を仕上げるため、一人で四〇本以上のノミを使う者もいる。彫る対象によって、鳥の眼、羽、石、枝葉、花びら、花心、さらには松葉、梅の花、蓮の花、蓮の葉など異なるノミを使いわける。大工は中国語で「木匠」というが、彼らはまさに「木の匠」とよぶにふさわしい。その木彫技術は、文化大革命を乗り越えて現代まで継承されており、一九九六年に中国政府文化部は、剣川県に「中国木彫の郷」の称号を与えた。



古い家並みが連なる麗江の町。世界遺産登録前（1996年）

漢族をしのぐ水準

この木の匠の技の歴史はすべて明らかになっているわけではない。しかし漢族の仏教建築技術を受容していることは定説になっており、端緒は唐代にさかのぼると言われる。当時、大理を中心に西南中国を支配した南詔国は、四川などに攻め入って技術者を連れ帰った。『蛮書』は南詔の支配者の築いた御殿の雄壮さを記録している。南詔末期に大理盆地に創建された崇聖寺仏塔は、唐の都、長安の大雁塔によく似ている。剣川県石鐘山石窟の石彫は仏教の隆盛と足並みをそろえ、南詔から大理時代（宋代）に刻まれた。

中国西南部の少数民族のあいだでは、このように、元来、漢族から流入した技術が独特に洗練され、地域内の漢族をしのぐ水準にまで到達したものが少なくない。それは西南部少数民族の工芸のひとつのあり方である。ある地区のある人びとに特定の技術が発達し、専門化し、他の民族にその技術を提供する。多民族が錯綜して居住する中国西南部には比較的多く見られる現象である。たとえば、戸撒地区のアチャン（阿昌）族は刀鍛冶に優れ、「戸撒刀」の名は雲南中に響きわたっている。彼らは国境を越えてミャンマーなどへも出向き、人びとからありがたがられていた。剣川は比較的標高が高く、他のペー族地域に比べて稲作が難しい地域である。その技を磨いた木の匠たちも国境地域まで足を伸ばして稼ぎ、活躍していたことが知られている。

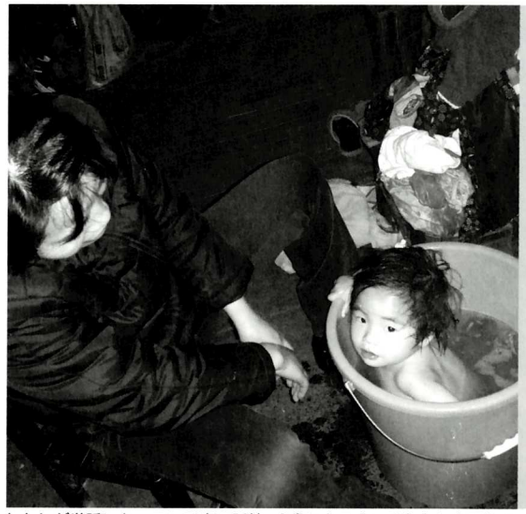
花鳥を彫った剣川の木彫。壁かけ細部

特集 西南中国

トン族にとって「チャー」とは？

兼重 努
（かねしげ つとむ）

滋賀医科大学准教授


わたしが世話になっている家の孫娘。2歳になるまではわたしを恐れていなかった

わたしは一九九〇年から、広西チワン族自治区の三江トン族自治県北部の、とあるトン族の村に通っている。現地のトン語で漢族のことを「チャー」という。漢族のサブ・グループである六甲人（リュウコウチャーレン）は「チャー・ケ」という。ケとは客。すなわち「外来の漢族」という意である。

しかし、必ずしもチャー＝漢族というわけではない。なぜなら、日本人であるわたしも現地でチャーとよばれるからだ。当初はわたしが漢族と間違えられているからだろうと思っていた。しかし、人びとは日本人と承知のうえで、わたしのことを「チャー・イッペン」とよぶ。イッペンとは日本の意味。つまりわたしは「日本のチャー」なのである。あるとき村に金髪碧眼（へきがん）のフランス人女性がやってきた。驚いたことに、彼女に対してもチャーという呼称が使われた。さらに、チワン族は「チャー・ション」、ヤオ族は「チャー・ユー」、ミャオ族は「チャー・ミュー」ともよばれる。トン族にとってチャーとは異民族一般を包括しうる概念でもあるようだ。

さらに別の含意もある。人民解放軍に入隊することを「チャーになる」という。警察官もチャーとよばれる。トン族であろうがなかろうが兵士や警察官はチャーなのである。また公務員になって、お上から給料をもらって生活することを、「チャーの飯を食う」という。チャーは官憲や公権力の類を連想させることばでもあるようだ。

わたしはチャーとよばれるのは嫌いだ。幼い子どもたちにとってチャーは恐怖の対象でもあるからだ。大人たちは「チャーがおまえを袋にいれて連れ去るぞ」とか「チャーがおまえの腸（はらわた）をえぐりだすぞ」という紋切り型の表現で、しばしば幼い子どもを怖がらせている。わたしが世話になっている家の二歳の孫娘が、急にわたしに寄りつかなくなった。大人からさんざんチャーの話を聞かされたからにちがいない、とその子の祖父はわたしに解説した。

チャーということばが多様な意味やイメージを担うのは何故なのか。それが今後の検討課題だ。

観光商品としての水かけ祭り

長谷川 清
（はせがわ きよし）

文教大学教授

雲南省には異なった言語系統に属する多様な少数民族が居住している。一九九〇年代以降、急速に進展してきた民族観光や民族文化の産業化は、長らく伝統として保持されてきた彼らの生業様式、風俗習慣、宗教信仰などに大きな変化をもたらしている。西双版納（シーサンパンナ）タイ族自治州において、タイ族を中心におこなわれる水かけ祭り（浴水節）の事例は、こうした問題を考えるうえで、示唆に富んでいる。

水かけ祭りは、タイのソンクラーン、ラオスのピーマイと同様の起源をもつ、タイ族の新年行事である。一九八三年、タイ族の民族行事に指定された。この行事が開催される四月には、毎年多くの観光客がシーサンパンナを訪れる。しかし、今日では正式の新年行事以外の機会や場において、観光のアトラクションとしてもおこなわれている。

観光化のなかで、周遊ルートに沿ったタイ族村落ではタイ族文化をテーマとする観光開発が進んだ。その典型が瀾滄江（メコン川）沿いのムンハム地区にあるタイ族園である。一九九八年、マスツーリズムの弊害を防ぎ、タイ族の生活環境をまるごと保存しつつ、観光収益を上げる目的で設立された。五つのタイ族集落からなり、亜熱帯の植物や自然環境、タイ族の高床式住居などからなる集落景観が郷愁を誘う。経営主体は、同地区の国営農場の経営者を中核に組織された「西双版納傣族園有限公司」である。

観光スポットである「浴水節・印象」の水かけ祭りの看板。
観光客は大勢のタイ族女性から歓迎される

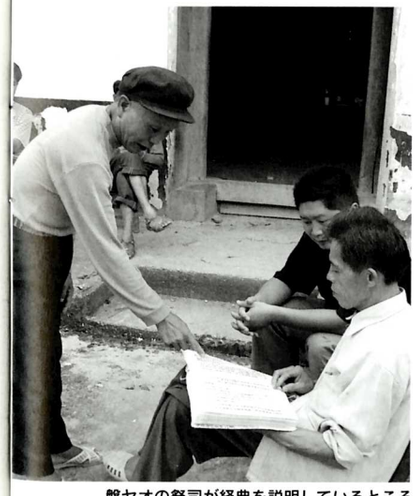
こうしたスポットを訪ねてみれば、すぐに気づくことだが、そこでは、タイ族の風俗習慣や宗教儀礼が観光商品として演出されている。最近、同公司はタイ族の水かけ祭りをまるごと体験できる「浴水節・印象」というスポットを、タイ族園と同じ周遊ルート沿いに建設した。入場券を買って公園に入ると、カラフルな民族衣装を身につけた大勢のタイ族の娘たちによる出迎えを受け、水かけ祭りを時期を問わずアトラクションとして体験できる。アトラクションとして演出された民族文化は、村民の生活を維持するうえでもはや不可欠なものとなっている。

エスニックマーカーとしての道教宗派

吉野 晃
（よしの あきら）

東京学芸大学教授

広西チワン族自治区の金秀ヤオ族自治県は、一大山塊がそのまま県となっている。その山のなかには、少数民族のヤオ族が集居している。ヤオ族といっても均一ではない。金秀のヤオ族は五つのエスニックグループにわかれており、漢族からは茶山ヤオ（チャーシャン）、花藍（ホアラン）ヤオ、坳（アオ）ヤオ、山子（シャンツ）ヤオ、盤（パン）ヤオとよばれてきた。これらのグループは、それぞれ言語も慣習、衣服も異なる。そうした言語と文化の違いは、それぞれが相互に意識している。言語の違いは明らかだし、衣服も特に女性の衣服は際だって異なる。このような、他のエスニックグループに対比して自らのエスニックグループの特徴を示すものをエスニックマーカーという。


盤ヤオの祭司が経典を説明しているところ
（広西チワン族自治区金秀大瑤山）

彼らのエスニックマーカーは言語や衣服だけではない。金秀の盤ヤオの祭司に儀礼の話を聞いていたときに、他のヤオとの儀礼の違いに話がおよぶと、彼らは事細かにエスニックグループ間の儀礼の違いを説明してくれる。ヤオ族の宗教は道教の影響が強く、異なるエスニックグループのあいだでも同じような儀礼がおこなわれているが、似た儀礼でも、その儀礼次第や、参加者の規定などはエスニックグループごとにかなり違っていた。

そのときに、盤ヤオは、太上老君（たいじょうろうくん）（老子）を奉ずる梅山（ばいざん）教であり、他のヤオや漢族は茅山（ぼうざん）教や閭山（りょざん）教という道教の別派であると聞いた。ある祭司は、盤ヤオは梅山教、山子ヤオは茅山教、漢族は閭山教であると言い、もう一人の祭司は、盤ヤオは梅山教で、山子ヤオ・坳ヤオ・花藍ヤオは茅山教であり、漢族は茅山教だろうと語った。

祭司たちの言は、盤ヤオが梅山教であることではおおよそ一致しており、その他の、漢族を含むエスニックグループについては諸説が交じっている。興味深いのは、道教の基盤をともにしていると認識したうえで、その宗派の違いがエスニックグループ間の差異として、明言されることである。異なるエスニックグループのところで盤ヤオの祭司が頼まれて儀礼をおこなうこともあり、相互に交流がないわけではない。言語や衣服などの違いとは異なり、漢族も含めた道教の共通の基盤のうえにさらに細かい差異を設定している。このように、金秀のヤオ族のエスニックグループ間の違いの認識は、エスニックマーカーの複雑な設定のうえに成り立っているのである。